みんなちがって みんないい～（その２）
～共生社会をめざして～

前回、通常学級の児童生徒の中に、一定数発達障がいと思われる子供もがいること、「障がい」は社会生活を営む上で「障がいがある」と考えるべきで、これは「ハンディキャップ（社会的不利）」と捉えることができること。学校生活を営む上で「障がい（ハードル）」がある児童生徒がいて、これらの子供たちに適切な指導や支援を行うことが学校の課題であること、までお伝えしました。

さて、今回は「発達障がい」の一つ、「LD（学習障害）」について基本的なことをお伝えします。

LD は「Learning　Disability（ラーニング ディスアビリティー）」の略で、「学習障害」と訳されています。言葉通り、学習に大きな影響が見られます。

LD で有名なのが、映画俳優のトム・クルーズです。先週から公開された映画「トップガン・マーヴェリック」や、「ミッションインポッシブル」など、有名な洋画作品に数多く主演しているので、ご存じの方も多いのではないでしょうか。

彼が LD であることは良く知られています。幼いころ、LD が原因で学習ができないこともあっていじめられたこともあったそうです。彼は文字の読み書きが苦手なタイプの LD で、読字障害（ディスレクシア）と書字表出障害（ディスグラフィア）の両方であると言われます。文字が上手く読めないので、映画の台本はスタッフや家族に代読してもらったものを録音し、それを何度も聞きながらセリフを覚えています。最近は上手に書けるようになったそうですが、デビュー当時は自分のサインもきれいに書けなかったようで、サインの一部が鏡文字（左右逆転した文字）になったものもあったそうです。

LD には他にも、算数の計算や図形が上手く認知できない算数障害（ディスカルキュリア）などもあります。

LD で有名な芸能人は他にも、ウーピー・コールドバーグやオーランド・ブルームなどのハリウッド俳優や、スティーブン・スピルバーグ監督など数多くいます。

現在、LD の原因は脳の機能障害によるものと考えられていますが、詳しい解明には至っていません。これは先天性（生まれつき）の障がいですが、事故などによる脳へのダメージで起こる場合もあります。

読字障害の人は、普段の会話には問題がなく、聞けば意味が理解できるそうです。しかし、字を読んで理解しようとすると、日本語が知らない国の言語に見えてしまうような感覚になったり、漢字がどれも同じものに見えたりするそうです。

書字障害の人は、文章を読むことも理解することもできるのに、いざ自分の考えを書いたり、人の話をメモしたりしようとすると、書きたい文字が分からくなるそうです。

保護者や地域のみなさんが、急にアラビア語圏の学校に編入し、「アラビア文字を書き取りなさい、そして読みなさい。」と言われたら、必死で真似をして書き写すことでしょう。アラビア語を言語としている人からすれば、「おいおい、左から右に書いてるよ（アラビア語は右から左に読み、書き進みます）」とか、「書き順がまるっきり違うじゃないか」と笑われてしまうかも知れません。

読字障害や書字障害の人は、普段話している日本語が、書いたり読んだりするときだけ、まったく違う言語のように目に映り、どれだけ練習してもなかなか上達することができません。

算数障害の人は、計算がなかなか理解できない、数の概念が頭に入らない、同じ図形の見分けがつかないと言われています。算数障害の人の中には簡単なお金の計算ができなかったり、数を記憶できなかったりして、アルバイトや仕事に支障をきたしている人もいます。

他の発達障がいにも共通することですが、決して本人の努力不足でもありませんし、家庭の躾（しつけ）の問題でもありません。

誰にでも苦手なことはあります。いわば個性だと言えます。LD も個性の１つと考えることができます。

ただ、そのままでは本人が困ることが多いので、適切な支援が必要になってくるのです。具体的な支援につきましては、一人一人の子供の発達段階で違ってきますので割愛させていただきます。ただ、どの子供にも大切な支援として、文字の読み書きや計算の理解ができないことで本人が、「自分はできないから、価値が低い」といった、「自己肯定感」が低くならないように、子供の特性を理解し、励ましていくこと、また、他人とは比べずに、その子の成長や頑張りを見て、具体的に褒めることが大切だと考えています。

次回は、ADHD についてお伝えします。

※参考文献　「みんなちがって　みんないい」
平戸市立田平北小学校　木村栄指導教諭

（文責　特支ＣＯ　山下　健一）